〔付論〕小川内(烽火台)遺跡と「笠木越」

村　上　豊　喜　〔熊本県立東稜高校教諭〕

1.はじめに

当該遺跡は、球磨郡から加久藤峠を越えて日向に至る、通称「笠木越」という旧街道の番所跡の裏山に位置していることに特色がある。そもそも、人吉から日向へのルートは人吉から湯前を経て横谷峠から米良へ向かうのが一つであり、もう一つが人吉から大畑を経て加久藤方面から現えびの市へ向かうルートである。第一のルートについて服部英雄氏(文化庁天然記念物課調査官)は、鎌倉時代の相良氏の年貢はこのルートによって京都に運ばれた、としている。第二のルートはさらに5本の細いルートが指摘されている。大畑から上田代へ向い日向飯野へ出る「たかの巣越」、大畑から一の渡瀬・小川内・笠置山・加久藤へと到る「笠木越」、「笠木越」の小川内から小川内川に沿い南へ向かって黒原へ出る「馬関田への間道」、大畑から大畑麓を経て矢岳で県境を越える「笹原越」、大畑麓から大野へ向い矢岳で県境を越える「吉田への間道」である。この中で、近世に番所が置かれたのが「笠木越」と「笹原越」の二つであり、街道として機能した。近世期の『明細記』によれば前者を「往還」、後者を「新往還」としている。従って「笠木越」が古いルートであったことが知れる。

2.中世の球磨郡と日向南西部

中世の球磨郡と日向南西部の加久藤盆地(中世では真幸院)の交流を物語る史料は多い。天養元年(1141)、球磨郡の住人貞倫とその舎弟六郎重平が同郡の住人守高(平河師高)をその城内より追い出し、雑物人馬・所領田畠を横領する事件が発生したが、この時、貞倫に与同したのが真幸院の住人の小郡司貞重・入田太郎貞明・草藤次貞守ら草部一族と肥後国住人八代藤三重永であった。貞倫は球磨郡の住人であるが、その名の貞からすると草部一族と考えられる。そうすると、真幸院の在地領主草部氏は国境を越えて球磨郡にも進出していたのである。草部氏は後に人吉荘田所としても活動している。逆に球磨郡の領主が真幸院に関与している例もある。建久8年(1197)の日向国図田帳では、須恵太郎が馬関田荘(現在のえびの市京町の西にあった安楽寺領荘園)の地頭であった。

南北朝期になると相良氏は同地方に積極的に進出し、14世紀前半の『相良定頼幷一族等所領注文』によれば、定頼分として真幸院内田地75町、平河師又三郎分が同20町、野口平次入道分が真幸院西郷内田地75町、薺田了仙房分が同西郷吉田村田10町としている。同注文によれば、こうした加久藤地域への進出のみならず、さらに東部地域の三俣院・財部郷(現都城市付近)にも球磨郡勢力の所領が記されており、南北朝期の支配注文だけに、額面どうりにうけとることはできないにしても、日向における球磨郡勢力の伸長を見ることができよう。この相良定頼の時期には、畠山直顕の代官を真幸院の田上・稲荷山の両城で破るなどの活動も見える。このよ

うな相良氏の日向進出は、当然、南九州三国の守護島津氏勢力との抗争をもたらすことになる。明徳4年(1393)、定頼の跡を継いだ前頼は弟三人と都城に出兵、恐らく前掲三俣院・財部郷確保に赴いたと考えられるが、翌5年、島津系北郷氏の居城を攻撃したが、島津元久の援軍の前に敗退し、前頼以下四人とも討ち死にした。これによって日向における球磨郡の勢力は一掃されたと考えられる。次代の実長は、長子前続の嫁に島津忠国の娘を迎えて親島津政策を展開しており、更に忠国から都城の替わりとして薩摩山門を与えられたと伝えるが、これは島津の内紛に際して忠国を援助した見返りであるとしている。以後の前続・堯頼・長頼・為続の代には日向方面との関係を物語る史料には恵まれない。むしろ肥後芦北郡・薩摩山門・同牛尿院・肥後八代等との関係が出て来る。

戦国時代に入ると、天文14年(1545)6月16日、相良氏の当主義慈に反した一族の上村治頼と同人に味方した人吉衆が真幸へ退出している。翌15年には日向の戦国大名に成長した伊東氏が逗留地の飫肥から球磨へ到っている。戦国期の相良氏は島津への対抗上、この伊東と手を結んでいる。天文23年(1552)には肥後守護の座を大友氏によって追われていた菊池義武が2月26日水俣の袋に到着、ここから3月16日球磨へ移動している。移動の目的は「球磨ニ御登候事ハ、日州のことく御出あるべきためニ候へとも、真幸こえも米良越も事成申さす候て、」とあるように球磨から日向へ落ち延びることであった。その二つのルートとして、真幸越と米良越が挙げられているのである。この真幸越とは、1の近世期の『明細記』の記述からすると、恐らく「笠木越」を指していると考えて良かろう。「笠木越」が一級文献に見える最初である。

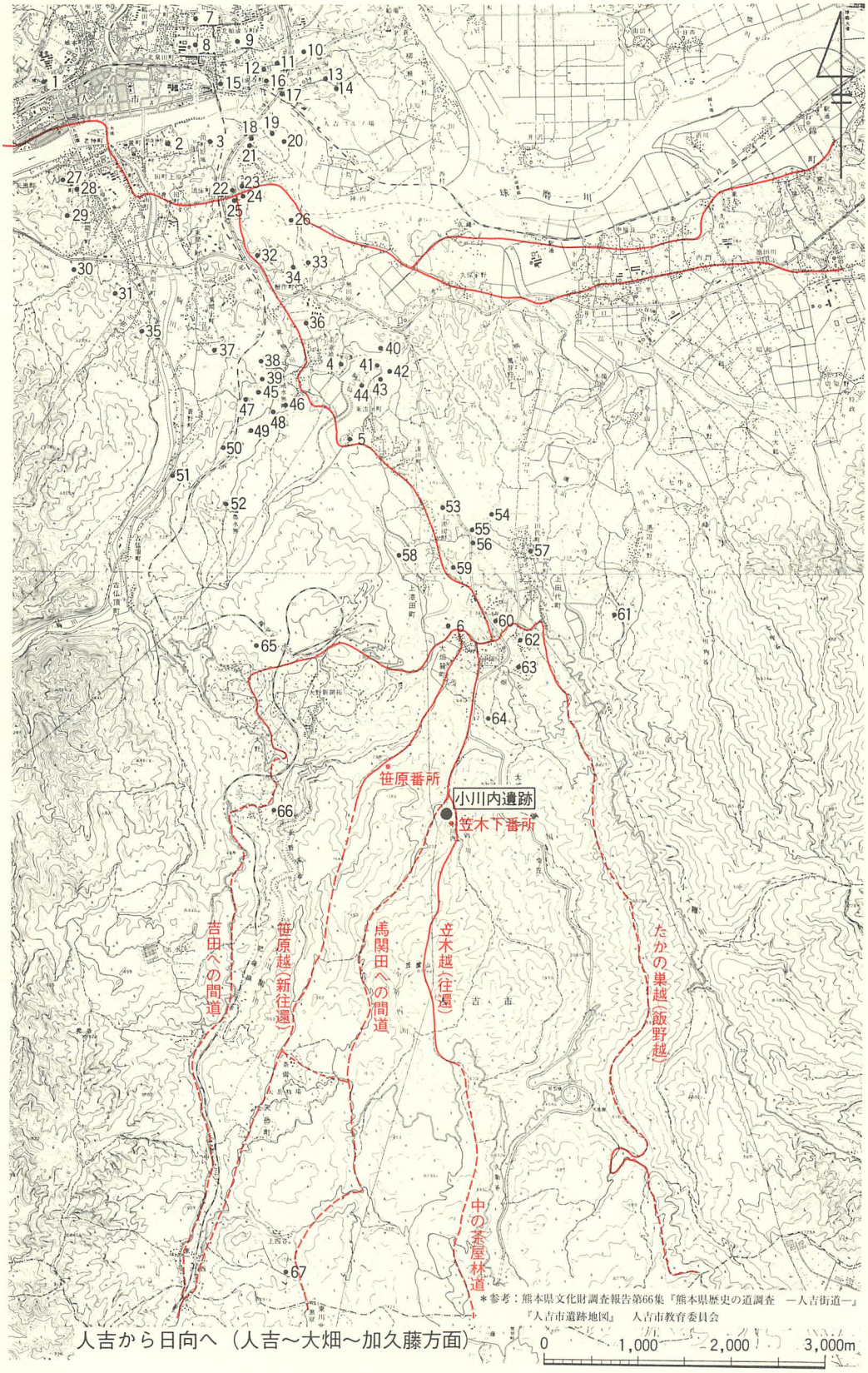
弘治2年(1556)相良氏は真幸攻撃に向い、真幸衆を打ち破っている。以後ここを前進基地として島津に備えたと思われる。翌3年8月8日、今度は真幸衆が人吉赤池口に現れ、130人が討ち取られている。同9月8日、真幸からの使者が人吉養国寺に遣わされている。恐らく前月の合戦の和議工作であろう。永禄2年(1559)3月14日には球磨から真幸へ「伏」(密偵)が出され、同24日に軍が派遣されている。恐らく島津が動いたものであろう。そして、4月12日、「日州」(伊東と思われる)から真幸へ祝儀の使者が来ているので、その動きを封じたものと考えられる。ところが、永禄5年正月になると、親島津の真幸家(北原氏)で内紛が勃発、北原民部少輔が殺害され、平方らが伊東に通じて、真幸が伊東の配下になる事態が生じた。同3月15日、相良氏の重臣団は佐敷に於いて会談。前後策を検討している。同5月10日、球磨衆が真幸に打ち入り、当主義陽も大畑城まで出陣、真幸への圧力をかけた。そして飯野(現えびの市)城在城の北原の一族又太郎に、飯野城をはじめとする五城に対する申し入れ(相良軍の管理)を条件にして、伊東勢力を駆逐したのである。平方ら親伊東派は「ミつの山」(現小林市)に後退、立てこもった。この時の出陣ルートは義陽が大畑まで来ているところから見ると、「笠木越」がその一つとして利用されたことは間違いない。一方、島津氏の方では、島津忠良が6月3日に真幸へ通ずる横河・菱刈への攻略を進めている。同14日真幸番(10日毎交替)の一番手として東弾正忠ら三名

の軍勢が真幸へ出発、6月8日には球磨からの番として佐牟田左京亮・赤池らの軍勢が、島津からの番として伊集院入道の軍勢が真幸に到着している。恐らく島津と相良氏の妥協が成立し、真幸の共同管理体制ができたものと考えられる。同8月16・23日、伊東方が真幸へ攻撃を仕掛け、北原一族上下26人が討ち死にしている。9月18日、島津は日南方面での反攻を強めたらしく、伊東の飫肥本城・サカ谷(いづれも現日南市)を落城させている。こうして、10月2日、当面の敵伊東攻略のため、島津義久と相良義陽は盟約を結んでいる。同24日三ッ山に退去していた親伊東派が飯野へと動いたが、撃退されている。11月17日、相良氏は真幸番を球磨のみではなく、領国の他の二郡(芦北・八代)からも派遣することとし、この日芦北衆が動員された。このことは、伊東(ひいては島津)に対し、領国挙げて真幸を死守する態度を示したものといえよう。翌正月3日、真幸番の八代衆を10町以上の領知者とし、在番日数を20日と決定、東左京亮方以下12名の手勢が真幸に向い、同月28日、八代へと帰っている。八代二番衆は正月24日、八代を出発。27日真幸到着、ここで島津忠良の仲介で伊東との和議の話がもち上がり、2月9日にひとまず人吉へ退去している。3月18日、伊東からの使者三名が球磨に到着、和議の話が進められ、5月2日には島津忠良・北原方よりの使者が八代に到着、和議の斡旋が行われ、6月6日、伊東より真幸・飯野・大明寺(現えびの市大明司)を相良氏に譲る旨の和議が成立した。この間5月14日には伊東方の攻撃により、真幸大明神(寺?)城が落城している。こうして伊東との真幸争奪戦に一応勝利した相良氏であったが、その後も伊東からの攻撃は散発的に続き、永禄7年7月5日、大明寺の「カコイ」で刈り働き(収穫前の稲を刈り取ること)などが行われている。しかし、伊東の脅威は一応去り、相良氏にとって最も警戒すべきは、当然島津氏である。同年2月11日、真幸に球磨・芦北両軍の兵を派遣したが、これが初めての島津忠良に対する防戦の兵であった。そして、同年3月10日「真幸通用の道求麻ヨリ造候」とあり、真幸への新道が開発され始めたのである。これが恐らく新往還「笹原越」であろう。

3.遺構との関係

当該遺跡からは、発掘調査担当の大田参事の所見によれば、烽場跡と思われる遺構が検出されている。そこからの出土炭化物のカーボン測定結果では、西暦1420年前後を示すという。文献上その年代を直接示す記事は確認できないが、南北朝期以降、当該遺跡の直下を走る「笠木越」の道が、球磨と真幸の軍用道路として活用されたことは2で示した通りである。当該遺跡の性格を烽場とする見解は文献上も極めて妥当な見解と考える。

参考文献：熊本県文化財調査報告第66集『熊本県歴史の道調査－人吉街道－』
服部英雄「空からみた人吉庄・交通と新田開発」(『史学雑誌』第87編第8号)
種元勝弘『人吉市史』第1巻
引用史料：『平安遺文』『鎌倉遺文』『南北朝遺文』『相良家文書』『八代日記』『明細記』など



＊参考：熊本県文化財調査報告第66集『熊本県歴史の道調査　―人吉街道―』
『人吉市遺跡地図』　人吉市教育委員会

人吉から日向へ（人吉～大畑～加久藤方面）